

## 4月の園だより

お子さんのご入園、ご進級おめでとうございます。

新入園児はもちろんのこと進級児にとっては、しばらくは緊張の毎日になるものと思われま。園では、一人ひとりの気持ちに寄り添いながらあたたかく見守ってまいります。

さて、新年度にあたり、「みみょう」の保育理念・方針をご理解いただくため、「みみょう（微妙）」の名の由来を説明します。

「仏説阿弥陀経」の中に、阿弥陀さまのおられる極楽浄土の蓮池の蓮の花の咲く様子をあらわして、「青色(しょうしき)青光(しょうこう)、黄色(おうしき)黄光(おうこう)、赤色(しゃくしき)赤光(しゃっこう)、白色(びやくしき)白光(びゃっこう)、微妙(みみょう)香(こう)潔(けつ)」という節があります。その意味は、青い花は青く光り、黄色い花は黄色く光り、赤い花は赤く、白い花は白く、それぞれが自分の色で光り輝いて、何ともいえないほど素晴らしいということです。「みみょう」という園名には、一人ひとりの子が、それぞれ持っている自分の個性を発揮して輝いてほしいという願いが込められています。

子どもが自分らしくいきいきと光り輝いて育っていくためには、いかに子どもを取り巻く大人たちが、子どもに関心を持ち、しっかりとかわり、しっかりと話を聞いてあげているかということに尽きると思います。「三つ子の魂百まで」と言いますが、特に3歳までは応答的なかわり（子どもの要求に応じて気持ちを受け止め、言葉を代弁し、同じことを満足するまで繰り返す）が大切となります。

また、昨今、グローバル化の進展や技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく変化する中、多様性と新たな価値を生み出していくことが求められています。そこで、「子どもを主体とした協同的な学び」がさらに重要視されるようになってきました。子どもが主体的、能動的に遊び込む中で人とのかわりや対話を通して学ぶことを促すという考え方であり、目標に向かって粘り強く頑張る力、人と上手にかかわる力、感情をコントロールする力といった“非認知能力”を総合的に高めることをねらいとしています。

“非認知能力”を育むためには、0歳からその子のあるがままを「愛し」、心から「ほめて」、そして「認めて」あげることです。そして、応答的で丁寧なかわりが「自己肯定感（自分は大切な存在だと無条件で感じる心の感覚）」を育み、五感を通して身体で感じる様々な経験につながり、「もっと〇〇したい」という意欲や探求心を高めていきます。さらに興味ある様々なことに粘り強く挑戦し、できなか

ったことができるという達成感を味わう経験の積み重ねが、“非認知能力”そして“生きる力”につながると考えています。

そうした考えのもと、みみょうでは、①子ども主体の保育、②非認知能力を高める保育、③自己肯定感を育む保育、という3つの柱を掲げて保育を実践しています。これらを実践していくためには、0歳から応答的で丁寧なかかわりを重視することはもちろんですが、学びに向かう力、言い換えれば、様々なことやものに興味を持ち、集中し、持続し、挑戦しようとする意欲を、遊びを通して身につけていくようにしていくことが大切です。そのことが、園名などにもあるように、一人ひとりの子が、それぞれ持っている自分の個性を発揮してひかり輝く保育につながっていくと考えます。

しかし、子どもの主体性は、園内での様々なあそびや経験だけでは十分に育ちません。主体性を育む一番の鍵はご家庭にあります。ご家庭内では「あれしなさい、こうしなさい」とつい大人が指示を出してしまうことも多いのではないかと思います。その場合指示がないと動けない子に育ってしまう可能性があります。そうならないためにも、子どもから「これはどうしたらいいの？」と聞かれたら、「あなたはどう思うの？」と聞き返すことが大切です。その積み重ねが、自分なりの考えをもって行動できるように少しずつ変わっていきます。また、指示することが多いと、考えを一方向的に伝えることにもなり、例え間違えがあったとしても、自分で考えさせるという時間も必要だと思えます。そして、難しいことはヒントをあげたり、二択などの選択制にしてあげてもいいと思っています。その積み重ねが、主体性を育むことにつながっていきます。

本年度も、毎日が「子ども中心の保育」であり、「楽しい保育」となるよう心掛けてまいります。どうぞよろしく申し上げます。

理事長 松尾 竜